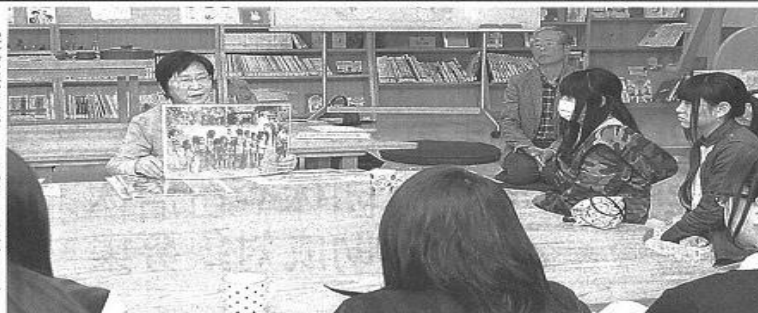


写真を示しながらカンボジアの子どもの実情を説明する松本淑子さん



松江 | カンボジア支援の夫婦

県立大生に現状と活動紹介

カンボジアの子どもたちに支援物資を送るボランティア活動をしている松江市内の夫婦がこのほど、同市浜乃木7丁目の県立大短期大学部を

訪れ、支援物資の荷造りや宛名書きボランティアを行う学生たちに、同国の実情を紹介した。

11人ボランティア参加へ

学用品や衣類を届けてい
るのは同市雅賀町の松本成
さん(70)と淑子さん(70)。
2人は2012年2月にカン
ボジアを訪れ、見学先の
小学校で児童らが学用品を
持たず、はたして歩き回っ
ている窮状を見ていたま
れなくなり同年5月に「カ
ンボジア・ボランティアス
レ」を立ち上げ、寄付など
を呼び掛けてきた。
短期大学部総合文化学科
の岩田英作教授(51)が昨
年、同市内で支援物資の募
集箱を見つけ、松本さん夫
婦の活動を知った。岩田教
授はゼミ生に支援を呼び掛
けるとともに、松本さん夫
婦に作業場所として同大図
書館の提供、作業への協力
だ。

を申し出て、昨年8月から
手伝い始めた。本年度は新
ゼミ生の2年生11人がボラ
ンティアに参加する。
学習会では、淑子さんが
これまでの経緯や今年2月
に物資を届けた際の様子を
説明。衣類や学用品、タオ
ルや鍵盤ハーモニカなどを
渡し、子どもたちが大喜び
した様子を紹介した。
成さんは「子どもたちの
敵しい生活を見ると人生観
が変わる。皆さんもぜひカ
ンボジアに行きましょう」
と呼び掛けた。
同学科2年、平田春陽さ
ん(19)は「写真を見てカ
ンボジアの現状を知ること
ができた。自分が力にな
れたらと思う」と意気込ん
だ。

おはなしライブラリー3周年

県立大松江
キャンパス

親子で楽しながら絵本を選ぶ環境が利用者に好評な「おはなしレストラン」



前年度比
16%増 貸し出し 3万8722冊に

松江市浜乃木7丁目、県立大松江キャンパス内にある中国地方唯一の児童書専門図書館が一般利用開始から3周年を迎えた。周りを気にせず子どもと話しながら本を選べる環境や、司書が子育て相談にまで乗ってくれるのが利用者に好評で、年間延べ1万4千人前後が利用。貸し出し冊数は右肩上がりで、2018年度は前年度比16.3%増の3万8722冊に上った。

09年度、同大学短大部保

育過程の授業で使う絵本や児童書の図書館として設置。心に栄養を届ける「絵本」を「料理」に見立てて「おはなしレストラン」と名付けられた。当時は一般公開しておらず、蔵書も3千冊ほどだったが、学生による地域の子どもに向けた読み聞かせ活動が、優れた大学教育の取り組みとして文部科学省に認定され、支援を受けたことで蔵書が充実。一般公開も実現した。現在は読み聞かせ用の大型絵本185冊を含む国内外の1万冊をそ

ろえている。利用は0歳から可能。母親同士での子育て情報交換の場や憩いの場としても活用されている。一般公開開始以来3年間、娘3人と通い続ける松江市乃白町の高尾なつみさん(38)は「司書が子ども本の好みを覚えていて勧められる。子どもが中心なので周りに気を使わなくて済むところも気に入っている」と満足。司書の尾崎智子さん(37)は「子どもたちの興味の幅が広がれよう」と話す。

「おはなし」今利用している未就学児が、小学生になっても高校生になっても継続して利用してもらいたい」と意気込んでいる。

平成26年5月3日付け・山陰中央新報

図書館で本の整理をしている。その本を借りてくれた人や「一緒に読んだ人」のことを「しているかな」と思い出します。

『つづきの図書館』柏葉幸子作、山本容子絵、講談社)では、お話の登場人物が本を読んでいた子どもの「続き」、つまり「読者のその後の人生」が知りたくて、絵本から飛び出します。

「はたかの王様や、座敷わらし」が現れたのは、図書館司書の桃さんのところ。桃さんの助けで、王様たちは「続き」を知りたかった読者と再会します。

読者はそれぞれ幸せに暮らしていたり、新しい一歩を踏み出そうとしていました。「ここで一安心のはずですが、王様たちは本の中へ戻らず、桃さんのそばにこまります。実は、桃さんはちよここと「訳あり」だったのです…。読後、じんわりと優しい気持ちが続く1冊です。

『ぼくだよぼくだよ』(きくちちさ作、理論社)は、けんかも含め、人と人が真剣に向き合うことが大切

だいたいつづきを教えてくれます。登場するライオンとヒョウは、それぞれ自分の方がすごいと自慢し合い、けんかになってしまいます。でも、言い合ひついに、一緒にいることの楽しさに気付き、いつの間にか仲直り。なのに、最後のページではまた自慢大会が始まりました。2

紙上
ブック
トーク

<尾崎 智子>

頭のけんかは、まだまだ、つづき。今回のブックトークはそろそろ終わり。いえいえ最後にもう1冊『まだまだつづきがあるのです』(カンタン・クレバン)作、ふしみみさを訳、ほるぷ出版)。ある日、1個のオレンジが木から落ちたことをきっかけに、次々と事件が起こりま

つづきのおはなし ▶▶▶ 「どうしているかな」

す。ページをめくると、事件はどんどんエスカレート。「まだまだつづきがあるのです」といるたびに「えー! まだ続くの?」と思わず言いたくなります。

続きのお話、まだまだ続けたいところですが、今日(3日)でおしまいです。(島根県立大学短期大学部松江キャンパス・おはなしレストランライブラリー司書)



『つづきの図書館』ほか

平成26年5月8日付け・山陰中央新報

昔話の絵本の一部で、以前とは少し違うストーリーのものが出てきています。悪者が退治されなかったり、人々食われる場面が明らされたりしています。子どもに残酷な場面を眺ませたくない、という20〜30代の保護者の思いが背景にあるからです。半面、原作に忠実な絵本がいくつか出版されており、教育観が多様化しているようです。

昔話の一部で悪者退治なかったり...

ストーリーちょっと違うよ



昔話の役割の「悪いことをしたら罰を受ける」教育の「こ」がありましたが、「様子は異なりますが、例えは、カニを殺したサルが、白に染まると「こ」押しつぶされる。おぼろげに合戦の結末は、サルが勝つ、仲直りする絵本があります。「からがら」は、おぼろげに殺したウサギ、ウサギのうへつた海を泳いで死んでしまいましたが、ウサギが謝って終わる本もあります。海外の昔話を直し、「赤ずきん」は、オオカミがおぼろげに食入る絵が追加され、「三匹のこぶた」はオオカミが鏡で察らされたおぼろげに逃げていく結

絵本「様変わり」

末もあります。

鳥根県立図書館（松江市）読書普及推進員の江角宏子さんによると、このような絵本は10年以上前からあり、複数の出版社が発行。江角さんは「ハッピーエンドや明るい話を求める若い保護者が増え、注目されているようだ」とみている。

実際に長年、内容を変えた絵本を出版しているフティック社（東京都）の編集担当者は「何年も一定の売り上げがある。そ

教育観の多様化背景に



昔話絵本の変化について話す岩田英作教授（松江市松乃木7丁目、鳥根県立大短期大学部松江キャンパス）

図書館で絵本を探していた松江市内の30代女性は「残酷な場面を子どもにどう扱えばいいのかわからない。楽しい話を聞き、明るい子どもに育ってほしい」と打ち明けました。

れ保護者に求められているから」と説明。昔話などを研究する岡山立大学短期大学部松江キャンパス（松江市）の岩田英作教授（51）は「今は原作に忠実な絵本が多いが、読者のニーズによっては今後、原作と違うものが増えるかも」と推測します。保護者の思いはさまざま。同

岩田教授は「絵本の読み聞かせは子どもの成長に深く関係する」と強調し、「面白い内容の絵本を読むだけでは、悲しみや怒りといった感情を知る機会が少なくなる」と指摘。昨年8月に発刊した、松江市教育委員会による選定「はだしのゲン」に関する疑問を提示し「大人は、子どもが読んだがる本を選んであげる」ことが大切だ」と説きま

「さるかに合戦」の結末の変化



サルが臼につぶされ退治される



サルとカニが仲良くなって終わる

し。

共生センターオープン記念
地域課題の解決法講演

東大教授 本田学長らと鼎談も



(左から) 小泉凡、東大教授、本田学長らと鼎談も

県立大短期大学部松江キャンパス(松江市浜乃木7丁目)に本年度開設されたしまね地域共生センターのオープニング記念講演会が14日、同キャンパスであった。労働経済学が専門で「希望学」を提唱する東京大社会科学研究所の玄田有史教授(松江市出身)が地域課題の解決法について講演し、県立大の本田雄一学長、共生センター長を務める県立大短期大学の小泉

凡教授と地域との連携について話し合った。センターは、大学の持つ専門的視点を観光資源の掘り起こしによる地域振興や、地域課題の解決などに結び付ける「地(知)の拠点整備事業」として文部科学省の採択を受け開設。学会を対象に地域課題の解決を担う人材を育成する「地域共生専門コース」の展開などを計画している。玄田教授は、人口減や過

疎化が進む島根の現状を踏まえ「困難や試練に直面したときに立ち上げられるかどうかを問われる」と指摘。希望をキーワードとして挙げ「与えられるものではなく、人と人の縁を支えにつくっていくもの」とし、地域の人がつながり合い、課題解決に向けた方策を探る必要性を説いた。本田学長は鼎談で「センターの事業を展開する中で『希望』を持って取り組み、視点を考えていく必要がある」と述べ、小泉教授は「地域の人がつながる縁を、学びや課題解決に生かしていけたらいい」と期待した。この日は松江キャンパスと出雲(出雲市西木町)、浜田(浜田市野原町)の両キャンパスを講義中継システムでつなぎ同時中継。3会場で計310人の学生や市民が参加した。

平成 26 年 5 月 15 日付け・山陰中央新報

率値
職定
就確

松江、浜田95%台

出雲キャンパスは99%

島根県立大は16日、今年3月卒業生のキャンパス別就職率の確定値(5月1日まとめ)を発表した。松江キャンパス(短期大学部)は前年を上回ったものの、浜田キャンパス(総合政策学部)と出雲キャンパス(短期大学部看護学科など)はわずかに下回った。(26面参照)

3学科の松江キャンパスは95・2%で、前年から2・7%上昇。学科別は保育が100%、健康栄養は97・3%で、ともに前年と同じ。総合文化は92・2%で前年を4・7%上回った。浜田キャンパスは95・3%で1・5%低下。就職希望者212人のうち10人が決まっていなかったという。看護学科と公衆衛生看護学、助産学の両専攻科がある出雲キャンパスは前年100%だったが、今年は1人が未決定で99・0%だった。同キャンパスは4年制の看護学部への移行期であり、同学部生が卒業するのは2016年3月からになる。本田雄一理事長は「他大学に比べれば高い水準だと自負しているが、低下したキャンパスもあり満足ではない。景気回復で就職状況が大幅に改善している印象はまだない」と総括した。

平成 26 年 5 月 17 日付け・山陰中央新報

県民意見「反対なし」

大学側 来月にも県に要望

島根県立大（浜田市野原町）の本田雄一理事長は16日の定例会見で、短期大学部（松江キャンパス、松江市浜乃木7丁目）を4年制化する試案について、県民から公募した意見に「反対」はなかったと説明し、「地

を4年制にするのが柱。意見公募は同11日～5月9日、自由記述方式で行い、24件が寄せられた。

本田理事長によると、23

件が4年制化に賛成で、より高度な資格を取得できる

▽関係職種の社会人が「学び直し」できる場が必要▽

受験生の県外流出を防ぐ、などの理由が挙げられた。残

る1件は、健康栄養、保育

両学科の4年制化には賛成しつつ、総合文化学科は2

年制を維持すべきだとの意見だった。

試案では、健康栄養学科を出雲キャンパス（出雲市西材木町）に移すことが

「望ましくない」と認め、

これについては賛成が4件、松江キャンパスのまま4年制化を求める意見が3件あった。

今後は3学科に関係する

職種・団体や松江、出雲両

市などの意見も踏まえ、要望内容を整える。本田理事長は「賛同はうれしく思う。6月中に県に検討をお願いしたい」と述べた。

松江の音楽文化盛り上げ

小泉八雲縁にセッション 市内で活動の2グループ



佐々田和樹会長（右から3人目）のボーカルに合わせてアイルランド音楽を演奏するキョール・アガス・クラックのメンバー

没後110年を迎えた小泉八雲ゆかりの地の音楽を演奏する松江市内の2グループが交流を始めた。米国・ニューオーリンズの音楽を演奏する「松江ニューオーリンズ倶楽部」と、山陰日本アイルランド協会有志でつくる「キョール・アガス・クラック」。八雲がつなぐ縁を大切に、松江の音楽文化の盛り上げを図る。

小泉八雲は幼少期をアイスキに過ごし、松江に住んだルランドで過ごし、19歳でここで知られている。米国に渡り一時、ニューオーリンズに所属するメンバーの39歳のと、小滝武治さん(41)

が4月に松江市内で開いた音楽イベントに、同倶楽部の会長でボーカルを務める佐々田和樹さん(64)が参加。「小泉八雲を縁に、一緒に演奏できないか」と小滝さんと話したことがきっかけでセッションを計画した。

このほど松江市内で行われた「キョール」の練習会に、佐々田さんが初参加。アイルランドの縦笛ティンホイッスルや打楽器バウロン、ギターなどで、アイルランドからニューオーリンズに渡った曲「レイク・ポーンチャー・トレイン」や、ニューオーリンズの伝統曲「聖者の行進」を演奏。佐々田さんの歌を乗せ、初めてのセッションが行われた。

発声して感触を確かめた佐々田さんは「アイルランド音楽の生演奏に乗せて歌うのは心地よかった。ニューオーリンズをキーワードに、多くの人とつながってみたい」と話した。

23日午後7時半から、松江伊勢宮町の飲食店Mizで初のコラボイベントを開く。同倶楽部と交流のある東京のバンド「ハチャトゥリアン楽団」によるライブと、小泉八雲のひ孫で「キョール」のメンバーである小泉凡さん(島根県立大教授)を招いた講演「ニューオーリンズとラフカディオ・ハーン」を行う。問い合わせはMiz、電話0852(322)1551。

島根県立大短大部四年制化

論説

県民の声を聴いてほしい

四大化すれば県内に短大がなく、高校生らにとって地元で進学する選択肢がなくなってしまう。そこをどう考えるか。四大化することで県内の大学の学部選択肢を広げて受け入れ能力を充実させるのはいい。一方で減っているとはい

島根県立大短大部は総合文化、保健、健康栄養の3学科、定員230人。前身の県立島根女子短大が2007年、県立大に統合され、短大部として設置された。

四大化の試案によると、現在の3学科を地域文化、保健教育、健康栄養の3学科に移す。四大化の趣旨について県立

この試案にパブリックコメントを通じて寄せられた県民の意見を添えて県に近く提出。県は大学設置者の立場からその可否を検討する。県立大としては県の同意を得たうえで文部科学省に四大化の許可申請を行う。

四大化の趣旨について県立

この試案にパブリックコメントを添えて寄せられた県民の意見を添えて県に近く提出。県は大学設置者の立場からその可否を検討する。県立大としては県の同意を得たうえで文部科学省に四大化の許可申請を行う。

四大化の趣旨について県立

え、経済的事情などから地元への進学を希望する高校生らにどう向き合うか。そのためには高校生とその保護者らを中心に県民の声を幅広く聴く必要がある。四大化は時代の流れとはいえ、公立短大に進路を求める声にも配慮してほしい。

このうち健康栄養学科は大は県内の高校生の県外流出を食い止めたという。県内の高校生のうち近年約3千人が大学に進学しているが、このうち地元で進学するのは15%前後。その比率は全国でも低い。

短大のままで高度な職業人を求める地域の要請に応え

大は県内の高校生の県外流出を食い止めたという。県内の高校生のうち近年約3千人が大学に進学しているが、このうち地元で進学するのは15%前後。その比率は全国でも低い。

短大のままで高度な職業人を求める地域の要請に応え

島根県立大学は松江市にある短期大学部を四年制に移行する試案をまとめ、実現に向けて6月中旬に県に提出する。志願者が減り続ける短大の四大化は全国的な傾向であり、県立大としても短大部を存続させることは限界に近いとして危機感を強めている。

県内でも高校生の四大志向が強まっているに加え、地域からも高度な知識を有した人材の養成を求める声が強まっているという。

そうした危機感や地域の要請を踏まえ、高度な職業人養成を目指す大学側の方針は理解できる。

しかし以前と比べ志願者は減っているとはいえ、県立短大部は一定の入試競争倍率を保っており、定員割れはしていない。

お父さんも読み聞かせを

6月を「読みメン月間」

おはなしレストランライブラリーに設けられた「おとうさんにおすすめのコーナー」



公立図書館に コーナー新設

推進会議 普及に力

県内の児童生徒の読書推進を目指す子ども読書活動推進会議（事務局・県教育委員会）は、父の日がある6月の1カ月間を男性による読み聞かせを推奨する「読みメン月間」と定めた。県内全38公立図書館などで、父親の読み聞かせにお勧めの絵本コーナーを新設したり、子どもと一緒に読んだ本の記録が付けられる手帳「読みメンてちょう」の無料配布をしたりして「読みメン」普及に力を入れる。

県教委が策定した第3次子ども読書活動推進計画（2014～18年度）に「読みメン育成プロジェクト」として盛り込んだ。父の日がある6月に男性による読み聞かせの啓発を進めるのが狙い。月間中、県内公立図書館などで父親向けの読み聞かせ講座などを計画している。

また、父親が子どもと読んだ本や子どもの反応、感想などを記録できる「読みメンてちょう」を月間に合わせ、「おとうさんにおすすめのコーナー」を新設。父親が子どもと読んだ本や子どもの反応、感想などを記録できる「読みメンてちょう」を月間に合わせ、「おとうさんにおすすめのコーナー」を新設。

松江市浜乃木7丁目の県立大短大部の児童書図書館「おはなしレストランライブラリー」では、月間に合わせる岩田英作・県立大短大部教授は「大切なのは一緒に

楽しむ姿勢だけ。難しく考えないで、多くのお父さん方に気軽に『読みメン』デビューしてほしい」と呼び掛けている。

八雲の息吹 生誕の地へ

没後110年記念、ギリシヤに資料室開設



小泉八雲の資料展示室が開設されるレフカダ・カルチャーセンター

愛用ペンや風景写真



小泉八雲

松江市 24点寄贈

文豪・小泉八雲（ラフカディオ・ハーン、1850～1904年）の没後110年を記念し、ゆかりの品を集めた資料展示室が7月、生誕の地ギリシヤ・レフカダ市にオープンする。これに合わせ松江市は、八雲が愛した山陰の風景の写真や愛用のペンなど24点を

出雲市斐川町沖洲が撮影した20点。八雲が通勤途中に立ち寄ったとされる城山稲荷神社や、自著「知られぬ日本の面影」で紹介した松江城、海水浴を楽しんだ稲佐の浜（出雲市大社町）などを選んだ。

八雲が再話した怪談「耳なし芳一」の自筆の原稿、愛用していたペンなどと合わせ、八雲のひ孫で島根県立大学短期大学教授の小泉凡さん（52）が、7月4日に現地であるオープニングセレモニーで贈呈する。

松江市観光文化課の二村真課長（53）は「寄贈品は、八雲の息吹が感じられるものばかり。松江を愛した八雲に、生誕の地で思いをはせてもらいたい」と話した。

寄贈。八雲の松江での足跡が常時、生まれ故郷でたどれるようになる。

松江市などによると、資料展示室は旧レフカダ市庁舎を活用した文化施設「レフカダ・カルチャーセンター」の一角に、レフカダ市が「ラフカディオ・ハーン